ＫＳＫＱ

NPOちゅうぶ 通信

2025年10月号

別府市ＩＬサミット2025参加報告	童夢KANSAIフェスティバル　チラシ
梅田おにごっこ　雨でも楽しく遊べました	香かなる映画上映会　チラシ
ちゅうぶを語る　代表理事　尾上浩二	木戸通雄の部屋
大阪×福島もちもちの会　研修・交流企画	とある送迎の車中のひとこま
ピアスクール卒業企画	協力会費　カンパ
杉原大地さん　自立生活プログラム報告	編集後記
バリアフリー演劇　チラシ	

別府市ILサミット2025参加報告

ナビの小坪です。9月8日―10日に大分県別府市であった「別府市ＩＬサミット」に参加してきました。
全国から16団体、105名が参加しました。
主に、尾上さんの情勢報告「障害者基本法を改正し法制度の底上げを」の部分を報告します。（文責：小坪）

＜別府市ＩＬサミットとは＞

現在、国内外で政治が大きく揺れ動いている中で、今後、障害者施策においてどのような変化が予想されるのか？また、どのような行動を心がけていく必要があるのか？を「知り」、今の制度を決して後退することがないよう情報共有を含めた「学び」の場となることを目的にNPO法人自立支援センターおおいたさんが主催された研修会です。

＜主な研修内容＞

・アメリカからの報告「トランプ政権下での障害者運動」・・ノア氏（前夢宙センター）八木郷太氏（ＣＩＬいろは）
・情勢報告「障害者基本法を改正し法制度の底上げを」・・・尾上浩二氏（ＤＰＩ日本会議副議長）
・グループワークーこれからの障害者運動について
・まとめ

【情勢報告「障害者基本法を改正し法制度の底上げを」】

●あらゆる取っ手に手をかけて積み上げた運動

尾上さんの話では、午前中のアメリカからの報告を受け、「トランプ政権の困難な状況下でも必死に闘っている運動に学び連帯しよう」とした上で、これまでアメリカの障害者運動から学び、地域での運動の積み上げ、デモや集会などの大衆行動、いろんな団体との共同行動などの運動の積み上げによって、障害当事者の取り組みで社会を変えてきたという流れの振り返りがありました。その上で、最近のトランプ現象や政治状況を見ると、国際人権基準の否定や優生思想的政策が浮上してくるなど、しっかりと立ち向かえる覚悟が必要な油断できない状況であるという認識の話がありました。

人びとが一緒になって、
あらゆる取っ手に手をかける

- 変化というものは、私たちが思うようなスピードでは、決して起こらない。
  人々が一緒になって、戦略を立て、分かち合って、あらゆる取っ手に可能な限り手をかけてみて―そうした年月の積み重ねがあって、はじめて変化は起こるものだ。
- 少しずつ、苦しいほどゆっくりとであっても、物事は動き出す。そして、ある時突然、まるで青天の霹靂のように、変化が起きるのだ（ジュディヒューマン）

●1970年代からの障害者運動の歩み

1970年からの地域での自立生活運動、バリアーブレイク（バリアフリー推進）、障害者権利条約、差別解消法の成立の流れの話をいただきました。

・ヘルパー上限問題の闘い

小坪は、ヘルパー上限問題の行動を思い出しました。ヘルパーの支給時間に上限を設けようという国の動きに対して、全国の障害者が立ち上がりましたが、この「上限」が認められてしまうと地域で暮らすことがで

きなくなるためちゅうぶでも、例会の障害者と共にみんなで必死になり闘いました。

・差別解消法の取り組み

それから、障害者差別解消法ができるまでの経過を改めて聞き感動しました。最初は障害者団体からも差別禁止の必要性を共感してもらえなかったにも関わらず、権利条約策定の国連特別委員会で傍聴した差別禁止の国際的な流れを障害者団体に訴え続け、障害者団体で合意を取り、アメニティーフォーラムの取り組みにつなげ、議員にロビーイングを展開していく過程の熱い想い、障害者の生活実態や制度上での困りごとをしっかりとロビーイングという形で議員に伝えていくなどのひたむきな取り組みが差別解消法に結実していく様がとても印象的でした。

●総括所見を実現する10年を

さらに、国連権利条約の総括所見で緊急の課題とされた「脱施設・インクルーシブ教育」を実現する闘いを軸に取り組みを進める必要があるという話を聞きました。

特に、地域レベルでのモデルを作り出し、国レベルの制度改正論議につなげていく取り組みが重要であるという話がポイントだと思いました。

ちゅうぶでも施設からの地域移行の取り組みを他のＣＩＬと共にを進めていますが、さらに頑張っていきたいと思いました。

ヘルパー上限問題勃発！ 毎日新聞2003.1.10

- 厚生労働省が身体・知的障害者が受けるホームヘルプサービスの時間数などに「上限」を設ける検討を始めていることが分かった。厚労省はこれまで、「障害者に必要なサービスを提供する」との考えに基づき、時間数に上限を設けないよう地方自治体に指導してきた。制度導入目前の大きな方針転換に、障害者団体は強く反発している。
- 関係者によると、身体障害者が受けるホームヘルプサービスは月120～150時間程度、知的障害者が受けるホームヘルプサービスは重度が月50時間、中・軽度が月30時間程度の上限を設定するなどの案が浮上している。これが実現すると、全面介助が必要な身障者でも、原則1日4～5時間程度しかサービスを受けられなくなる。

あらゆる取っ手に手をかける②

- 例2.障害者差別解消法
  - アメリカでのADA制定の衝撃→日本各地で学習会
  - 2002年 当事者がつくる差別禁止法案
    →他団体からは「差別なんていうと障害者施策が遅れる」
    法制局からは「日本の法体系を変えるもの」
  - 権利条約策定の国連特別委員会～JDF傍聴団派遣
  - 差別禁止が国際的な流れであることを他団体含め共有
  - ヘルパー上限問題～「自立支援法」反対運動のうねり
  - 千葉県・差別禁止条例（2006年）から全国各地に
  - 障害者制度改革で差別禁止部会意見(2012年）
  - 2013年 アメニティフォーラムでの自公民3党合意

総括所見を実現する10年を

- 次の審査は2037年に～これもトランプ政権の影響
- 緊急テーマ＝「脱施設・インクルーシブ教育」
  - 分離に慣れ親しんだ社会からの根本的な転換
  - バリアフリーも差別解消法も排除・分離との闘いではあるが、いよいよ本丸に
- 脱施設、インクルーシブ教育を軸に様々な分野にも
  - 就学前からのインクルーシブな支援
  - インクルーシブ雇用
  - バリアフリーで安い家賃の住宅確保
  - 地域生活のためのサービス・人材の飛躍的な充実 etc

障害者基本法改正と各課題

- 各課題と障害者基本法の相互関係
  ～障害者基本法改正で底上げすることで各課題に影響を及ぼすというのが基本戦略
- だが、基本法改正は各政党間の合意・調整が不可欠で、しばらくは見通しが悪い状況。
- 脱施設やインクルーシブ教育などの各課題取り組みと基本法改正の同時並行的な展開
- いずれにせよ地域レベルでのモデルを作り出し、広げ国レベルに押し上げていくことが不可欠

3日目のバリアフリーチェックは雨天中止になりましたが、今回のＩＬサミットはたくさんの学びがあったと思います。ありがとうございました。

梅田おにごっこ　雨の中でも、楽しく　遊べました！

参加者　363名

10月4日（土）、朝からの雨でしたが、363人（内スタッフ59人）の参加がありました。

2日前までの天気予報では4日の夜は雨でしたが、日中は降らないだろうとみんな楽観視していましたが、途中2度ほどしっかり降っちゃいました。それでも雨を理由に不参加の人は意外と少なく、当日参加者もいて、前日の予想とほぼ同じ人数でした。

受付でもしっかり濡れました

10時前からスカイビル1階ワンダースクエアで受付。ここは東西２つのタワービルに挟まれていて、見上げると40階は東西のビルの間に空中庭園がありますが、しっかり濡れます。10時前から受付開始。テントも用意しましたが、参加者は傘とカッパ。今回はバッグ状の特製クリアファイルにマップ、ウォークラリーの冊子などを入れました。受付で簡単に説明をしていざウォークラリーへ出発。

ちょっと凝ったクイズのウォークラリー

ウォークラリーエリアはＪＲ大阪駅から北西、グラングリーン大阪です。グラングリーン大阪は真ん中に大きな芝生があります。参加者は４つのコースに分かれて出発。

各ルートのスタート地点は、＜Ａルート：グラングリーン南館スタート＞＜Ｂルート：うめきた公園北＞＜Ｃルート：ＪＲ大阪駅南ゲート＞＜Ｄルート：ルクア２階＞。そこからLINEでクイズに答え次のポイントを探します。４つ全部回るのも大変ですが、早いチームは 13時にゴールされていました。

ポイントやクイズなどはスタッフが事前にかなり調査した、ちょっと凝ったウォークラリーで満足度も高かったようです。念のために道に迷った人のお助けスタッフも配置しました。

ワンダースクエアでフェイスペインティングとかいろんな企画

会場のワンダースクエアでは、10時～13時、一般の観光客も無料で参加できる企画として、フェイスペインティング、ＩＭＣ（インクルマスターチャレンジ＝福祉障害体験コーナー）を実施。

フェイスペインティングは、千日前商店街でも定期的に開催されていますが、プロの画家がいろんな絵を顔や腕に描いてくれます。中には顔全体に描いてもらって「変身」した人もいました。子どももたくさん参加してもらい外国の観光客にも大人気で行列もできていました。

IMC（インクルマスターチャレンジ）福祉障害体験コーナーを実施

ＩＭＣ（インクルマスターチャレンジ）福祉障害体験コーナーは、普段あまり関わらない「障害」や体験をしてもらおうと企画。ワンダースクエアは広い。スカイビルは実は世界的にも有名なビルで外国人観光客も多い。子どもも、いろんな人にも参加してもらいたいと思いました。

ＩＭＣでは特製のカードを用意。一つチャレンジするごとに駄菓子プレゼント、３つ以上でインスタントカメラの写真プレゼント。電動車いす体験など外国の方も何人もチャレンジ。「福祉関係の仕事をしており、電動車いすは見たことはあるが、乗ったのは初めて」という外国の方もいました。用意したのは以下の５つ。雨でも２０人以上が参加してもらえました。

★電動車いすチャレンジ 牧口一二さんの座面が上下する電動車いすで８の字走行を体験。11人乗りＥＶモックアップに乗る！（ＣＩＬあるるに担当してもらいました）

★手動車いすチャレンジ ミニ車いす講習として、1～２㎝段差体験と車いすの押し方講習。10㎝のパレットで段差の乗り降り体験（ＣＩＬムーブメントに担当してもらいました）

★視覚障害チャレンジ アイマスクをして机の上のもの「どれがこんにゃく？」を当てる。また市販のシャンプーとリンスや牛乳とジュースのパックの違いを体験（夢宙センターに担当してもらいました）

★聴覚障害チャレンジ ヘッドホンで周りの音が聞こえない状態で聴覚障害の松倉さんがジェスチャー等で何を伝えようとしているのかを考えてもらいました。

★言語障害チャレンジ 脳性麻痺で言語障害のある渡海さんがしゃべる言葉を当ててもらいます。どのジャンルかを選んでもらいます。ポケモンとか外国人でもわかった！？

↓フェイスペインティング

↓IMC 福祉障害体験コーナー

コンサートとお笑いも

2時からは梅谷陽子さんミニコンサート。とても素敵な歌声に癒されました。2時半からは松竹芸能の3人のピン芸人「イヌダ・小林シャネル・たかお」さんのお笑い。結構笑えました。

ラストの寸劇　暴走するバリバラちゃんを制止するんだ

3時からは雨もやみ、空中庭園チケット抽選（20人）とラストの寸劇。誤情報によって暴走したバリバラちゃんを巨大注射器で修正するインクルハントのドタバタ劇。最後は６メートルのエア人形登場！　２方向から記念撮影。雨との闘いでもあった一日。最後は雨も止み、少し晴れ間も出ました。

参加者の感想

東京や愛知からの参加、ちゅうぶのメンバーなど感想を聞きました（車椅子含む）。

- 謎解き、バリアフリールート、トイレマップ、観光スポット、オブジェなど見どころ満載！
- 何も考えずに歩く楽しさもあるが、クイズやマップと向き合って頭を使いながら歩き、ルートを発見することの充実感を味わえた。
- クイズを解くことによって、オブジェや建築の設計者の意図もわかり、まちの見え方もかわる。
- 昼食はルクアイーレの地下2F のスーパー内フードコートで食べたが、席取りが大変。
- ＪＲ御堂筋口→ルクアイーレあたりまでは人口密度が高く、視界が狭くなった。
- 知らない土地で視界が狭くなると、表示が見えなくなることが改めてわかった。
- ルクア、ステーションビルのエレベーターはチーム全員が乗れるまで 10分か 15分はかかった。待ち時間はいろいろ話ができてよかった。

【ウォークラリー仕掛人より】

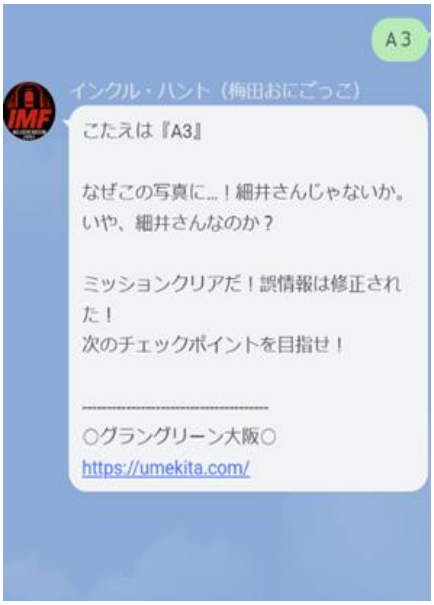
今回のおにごっこは“大阪・梅田”での開催。梅田貨物駅跡地の再開発によって新しく生まれ変わったうめきたエリア。

おにごっこ恒例のウォークラリーですが、例年とは一味違った様子でした。企画段階の課題としては“各所に人を配置できない”というところ。昨年までの『なんばおにごっこ』では、千日前商店街の協力により、各所にスタッフの配置が公認されていましたが、今回は街の特性上、公認されたスタッフの配置ができませんでした。

その課題を解決するために選んだのが『謎解き形式に設定されたウォークラリー』と『公式ＬＩＮＥ』の活用。謎解き形式に設定されたウォークラリーには、専用の冊子を準備。全22ページの冊子にはＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ全4種類のルートを記載。それぞれにミッションと表されたポイントの紹介がありました。現地に行くことで、そのミッションの謎が解けるシステムです。

例えば、Ａルート最初のミッションは下の写真のような感じ。『タイムアウトマーケット』の簡単な情報と付近に実際に存在する展示物が載っています。冊子上の写真は一部手が加えられており実際現地に向かうことで、どこに手が加えられているのかを回答することができるという仕組みです。…といったような感じでミッションを進めていくのですが、肝心な回答方法と現地での詳細説明について。ここに『公式ＬＩＮＥ』が活用されました。

公式ＬＩＮＥには自動応答メッセージという特定のキーワードを入力することで、あらかじめ設定しておいた文言を自動で返信するという機能があります。下の画像のように、現地に到着次第『タイムアウトマーケット』と公式ＬＩＮＥに入力することで問題の詳細と指示が返信されるようになっていました。このことにより、ポイントにスタッフを配置せずとも、道案内やウォークラリー中の指示を可能にしてくれました。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄのルートには各4問ずつのミッションがあります。全てをクリアすることでうめきたエリアのおおよそが把握できるような作りになっていました。“謎解きウォークラリー”に関しては、様々な事業が各地で活用しており『楽しみながら街歩きできる』や『楽しみながらその場所・モノを知ることができる』といった画期的な取り組みです。この取り組みを活かせば、障害者と社会を繋ぐ可能性がさらに広がるんじゃないかとこれからの取り組みにワクワクします。



ちゅうぶ40周年に際して

これまでのちゅうぶ、これからのちゅうぶを語る

～事務局・理事のインタビュー　第13弾　尾上浩二（代表理事）

堀（編集部）：ちゅうぶは 2024年12月に 40周年を迎えました。40周年に際し、事務局や理事の方に、これまでのちゅうぶを振り返り、ちゅうぶの将来を語っていただくという趣旨で、いよいよ最終回です。
まず、尾上さんの障害者運動との出会いから聞かせてください。

大阪青い芝の会との出会い　座り込み！

尾上：僕は脳性麻痺の障害者として生まれ、養護学校、施設、地域の学校を経験し、1978年に大阪市立大学（現大阪公立大学）へ入学し、当時の障害者解放研究会主催の「青い芝と学生の話し合う会」で青い芝の坂本博章さんや松井義孝さんに出会ったのが始まりです。
坂本さんは脳性まひで両手両足に障害があり全面介護が必要で、、介助者に「おい、たばこ！」と指示をして吸っていました。身の回りを自分ですることが自立だと思い込まされていた僕は、介助を受けながらタバコを吸う姿に、自立生活の原風景を見た感じがしています。
当時は、1979年の養護学校義務化の前夜で反対運動が盛り上がり、豊中をはじめ大阪各地で共生共育が広がり、障害者、教師、部落解放同盟が一緒になって全市町村の教育委員会と交渉をし、「入学に際しては本人・保護者の意思を尊重する」と確約を取っていきました。
ある時、大阪市養護学校義務化阻止共闘の事務局長の坂本さんから、「大阪市教育委員会と交渉するから来い！」と言われ同行しました。当時は、いきなり押しかけていって要望書を読み上げ、今から交渉せよと言い放ち、無理と言われても、交渉の約束をしないと帰れないと、座り込みに突入するわけです。

初めてでわけが分からず、高校の友達と約束があって「何時ごろまでですか？」聞いたのですが、「そんなんわかるかー！」という感じで、結局、20時頃まで座り込んでいました。

どう生きたらいいのか悩みが吹き飛んだ爽快感

尾上：僕は、中学、高校と地域の学校でした。「決して手は借りません。」と念書を書くことでなんとか入学を許されましたが、修学旅行には連れて行ってもらえませんでした。しかし、医学モデルを内面化していたので、「歩けないから仕方ない。修学旅行にいかない時間に本が読めて良かった」と自分を納得させていました。一方で周りの子どもとの違いで自分はどう生きたらいいんだろうとすごく悩んでいたんだけど、青い芝の運動の出会いというのは、そういうモヤモヤしたものが一挙に吹き飛ばされる爽快感というのがありました。自分が感じていた苦しさが尾上個人のものでなくて、障害者として社会的に作られたものだということを知った時の解放感、その時に、同じ障害を持つ仲間の共通した問題で、仲間がいるんだということに気づいたわけです。自分にとっての人生の大きな転機でした。

ちゅうぶと関わるきっかけ

堀（編集部）：尾上さんはもともと南部所属で、中部地区強化のためにちゅうぶに投入されたと聞きまし

たが、ちゅうぶとの関りの初めはなんでしょうか。

尾上：ちゅうぶの名の由来は、大阪青い芝の会の中部地区ということで、地区ごとに分かれていたわけです。大阪市立大学は南部地区の担当で、僕は南部所属でしたが、当時、障害者解放センターを各地区に作る構想の中で、1983年ぐらいに、僕は中部地区に移ることになりました。それがちゅうぶとの関りはじめです。

当時の時代背景を少し説明すると、1977年頃から青い芝は介護者との関係をめぐって、運動的に大きく揺れて、1980年代当初は、大阪では運動の再建を図っている時期で、生活要求一斉調査や拠点(障害者解放センター)作りの取り組みが展開されているところでした。

大きな転機　生活要求実態調査

尾上：僕にとって大きな転機になったのは、生活要求実態調査です。1980年に100項目ぐらいのアンケートを作って、障害当事者が調査員になって、在宅障害者を訪問して聞き取り活動をしました。その結果、お風呂に入りたくても夏でも週1回も入れていないとか、外出したくても介護がなかなか無いなどの酷い実態がいろいろと明らかになりました。
そして、調査で関りができた在宅・施設の障害者に集まってもらって生活座談会を開催し、困りごとを語り合ってもらいました。お風呂問題等とても盛り上がりました。ちゅうぶの長老だった星野勝史さんが青い芝に関わるようになったのも、この活動がきっかけです。

一生涯をかけて運動をやらなアカン！

尾上：特に、僕が衝撃を受けたエピソードを紹介します。
調査先は、堺養護を卒業して7年以上たって、生保で父子家庭でした。久しぶりの訪問者ということでいろいろ話をしてくれました。生活要求一斉調査の外出の調査項目で、「月に2回ぐらい」というお答えで、「どこに行かれますか？」と聞くと、「大和高田」と言われたと思います。「どういう目的で行かれるのですか？」と訊くと、父は「そこらへんぐらいにしとかないと、片道4、5時間ぐらいかかるからその日にうちに帰られへんから」と。尾上「え？歩いていってはるんですか？」、父「そうやんか、車椅子で電車は乗られへんから」という答えが返ってくるわけです。
車椅子だったら、電車に乗れるという発想すら持てない、そういう事実に打ちのめされました。こんな無権利状態でそれを当たり前に思わせ、放置している社会に怒りを感じ、変えないといけないと強く思いました。自分の中で運動は一生涯かけてやらなアカンと思った原点ですね。

施設や在宅の障害者とつながる運動の原点

尾上：青い芝運動は青い芝の思想性がよく注目されます。横浜での障害児殺し事件を出発点として、優生思想を一番に告発したのは青い芝で、我々は脳性麻痺者であることを自覚する、本来あってはならない存在であることを凝視するところから始める強烈な思想ですね。
一方で、関西、特に大阪では、「そよ風のように街にでよう」という大衆運動があって、思想性とともにいろんな障害者がごちゃまぜになって取り組むという厚みがあったと思います。1980年度当初の再建の時期の生活要求一斉調査も、みんなで創る運動の一つだったと思います。
青い芝運動にとっても、生活要求一斉調査で、施設に居る障害者や在宅障害者とつながって、運動を進ていくという原点ができたと思うわけです。
そして、生活座談会を積み上げ、要求をまとめあげ、障害当事者の立ち上がりを作って、行政と交渉する、そういう運動の拠点となる障害者解放センターを

各地に作るという構想だったのです。

堀(編集部):拠点となる障害者解放センターを作る大阪青い芝の会の運動のなかで、中部地区が重視された背景があったのでしょうか。

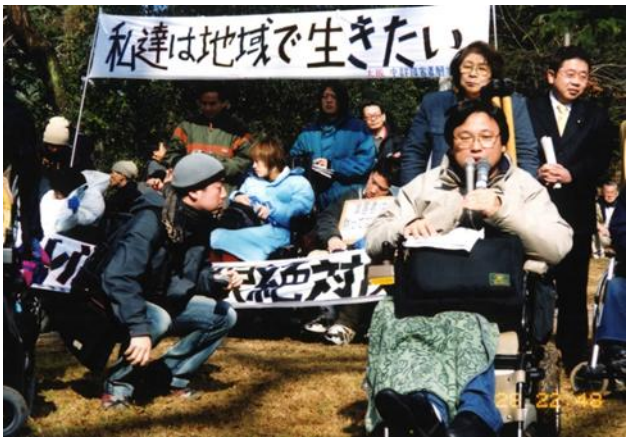
尾上:ちゅうぶが重視されたのは、解放センターを作る上で、大阪市との交渉実績をふまえ中部地区でまずは突破口を作ろうということでした。1984年12月にちゅうぶ(中部障害者解放センター)のオープンイベントでは実行委員長が大阪青い芝の会事務局長の坂本さんで、まさに、青い芝の会全体で力を入れた取り組みでした。

青い芝は厳しいけど筋が通っている

尾上:実は、大阪青い芝の会は、行政との信頼関係があり、毎年、大阪市と定期協議をもっていました。障大連が定期的にオールラウンド交渉を持つのが1987年ですから、当時は唯一といっていい交渉窓口です。
青い芝は厳しい内容で交渉するので、行政は硬い対応をしがちですが、大阪市は、「大阪青い芝の会は厳しいことを言うけど彼らは本物だ、筋が通っている」って思ってくれていました。
当時の会長は、四条畷の森修さんという最重度のリクライニング車椅子に乗っておられ言語障害もありましたが、ズバッと筋が通った重みのある発言をしていました。
大阪市は、僕たちとの交渉の結果、重度の在宅障害者の介護保障は命に関わる問題だと、大阪青い芝の会に対して、介護専従スタッフ配置のための助成金を出すなどをしてくれました。

野々村さんの介護保障を考える会

尾上:その上で、特に中部地区となったのは、野々村さん問題があったからです。
彼は、駒川中野で、母と二人暮らしの在宅障害者で、母が体調を崩し、このままでは施設に入るしかないという介護危機でした。
中部地区では、中村範久さん(現ちゅうぶ理事)、石田さん(現事務局長)を中心に、区役所や市役所の労働組合、教職員組合や地域の市民団体と介護保障を考える連絡会を作って一緒に運動を進めていったんです。具体的な介護保障の問題で、運動の広がりを作って交渉を進めていけているということで、中部地区の拠点整備を突破口にしようとなったわけです。



ケア付き住宅研究会 グループホーム作り

堀(編集部):ちゅうぶの障害者は今でも尾上さんを慕っています。当時、生活や活動をどんなふうに一緒にしていたのでしょうか。

尾上:一つは、ケア付き住宅研究会を作り、全身性介護人派遣事業の時間数を伸ばす取り組みやグループホームを研究して、運動として作り上げていったということです。

神奈川県へ障害者メンバーと学びに行く

尾上:横浜市の自薦ヘルパー制度(障害当事者が推薦したヘルパーが派遣される仕組み)や相模原市の白石清春さんが中心に進めておられるケア付き住宅制度を学ぼうと体験入居にちゅうぶの障害者メンバーと一緒に行きました。
そして、大阪市でもケア付き住宅研究会を作ろうと提案して、大阪府立大学の定藤丈弘先生、桃山学院大学の北野誠一先生に加わっていただきました。運動団体側が事務局として回し、行政も参加してもらい、坂本さんが事務局長、僕が事務局長補佐みたいな感じでした。

全身性障害者介護人派遣事業の時間数延長

尾上：その研究会を通じて、大阪市独自の身体障害者を対象にしたグループホーム（GH）が生まれました。僕らが考えていたGHは、GHの中だけで完結するのでなく、外のヘルパーも使って24時間の介護を保障するGHでした。

したがって、全身性障害者介護人派遣事業の時間数を伸ばすことが非常に大事でその当時は月24時間だったので、研究会で検討して、150時間ぐらいまで伸ばすことができました。

GH建設のための映画上映会、募金活動

尾上：しかし、制度だけでなく、それに伴って様々な運動が必要でした。一つはGH建設のための資金作りです。

バリアフリーの物件はないので、改造するだけで7～800万円必要でした。そのお金を集めるために、映画の上映会、街頭募金をすごくやりました。

自立生活プログラムの実施

尾上：それから、ウィークリーマンションを借りて、今でいう自立生活プログラムをやりました。当時のメンバーでは西川和男さん、後藤寛子さんが居ました。その時に、ピアカンという言葉はありませんでしたが、僕も中心的に体験宿泊に関わっていました。スタッフと受講者という感じではなくて、とにかく一緒に居て、ワイワイやっている感じでした。

こういう取り組みを通じて、同じ釜の飯を食う仲間という感じがすごくありました。

通所でアクセスクラブ、電動クラブで活動

尾上：もう一つは、作業所ができて、最初の何年かは僕も利用者だったということです。実際に週に2回作業所に参加していました。山本敏晶さん、星野さん、西川和男さんとか一緒にアクセスクラブ（自分達でバリアチェックをして発信する）、電動クラブ（電動車椅子の操作練習を兼ねて外出する）を作って、活動をしていました。

当事者が作業所を作る　画期的なできごと

尾上：当時、法人格を持たない無認可事業所が運営委員会方式で助成金をもらえる制度がありました。当時のちゅうぶの重要な財源だったわけですが、これを巡って、考えさせられたエピソードがありました。肢体不自由者協会を通じて手続きがなされるので、説明会にちゅうぶの作業所の代表として瀬古幹子さん（脳性麻痺の自立障害者）が参加されました。

説明が終わり、瀬古さんが「質問！」と発言しようとしたわけですが、「あなたが発言する場でないです。静かにしなさい。」と相手にしてもらなくてとても腹が立ったという話を瀬古さんきから聴きました。当時の作業所のほとんどは親が作って運営していましたので、場をわきまえない利用者（障害者）が煩くしているぐらいに思われたのでしょうか。

障害者は保護の対象で、運営する主体ではないとみんなが思い込んでいたということを象徴するような話です。だからこそ、当事者が作業所を作るというのはとても、画期的なことだったんです。

介護だけでなく一緒に企画した大交流キャンプ

尾上：大交流キャンプの存在も大きかったと思います。琵琶湖とかに1泊2日でいくわけですが、その準備は、障害者と新しく介護の入り始めた学生も一緒にやるわけです。介護だけでなく、障害者と一緒に企画するということがとても大事だったと思

います。

泣き笑いの自立生活プログラム

尾上：自立生活センターナビが98年に立ち上がり、最初の代表に僕がなりました。ピアカンの常連では鈴木昌守さんがいました。

彼は、ずっと、在宅障害者として過ごしてきた人でした。大交流キャンプに行くのが大変で、親の介護しか受けたことがないので、親と離れることがその瞬間になって怖くなってしまう。環境が作りだした障壁をすごく感じました。

彼は自立したいと思うようになり、GHの宿泊体験をしました。カレーを作って「みんなにふるまうんだ、尾上も食べに来てくれ」と、2日目に買い物、作業所に行って家に帰るというプログラムです。いざGHへ向かおうとしたら怖くなる。それでもGHへ行き、カレーをつくって一緒に食べました。

僕の時代は、自立の取り組みを一緒にしながら、泣き笑いみたいなことがたくさんありました。

ＤＰＩ事務局 長として東京へ ヘルパー上限問題、介護保険統合阻止

堀（編集部）：2003年から2014年までＤＰＩ事務局長として東京で活動されていたことを教えてください。

尾上：ホームヘルパーの上限問題がありましたね。2002年、ＤＰＩの札幌大会のプレイベントということで、全国３３カ所で講演して回りました。それが一段落というときに上限問題が勃発し、2週間の座り込み闘争に突入しました。

僕は東京に泊まり込んで対応に当たりましたが、その後、2003年、4年は介護保険への統合問題がでてきて、介護保険に統合されたら、重度訪問介護もなくなるし、全力で阻止するために、ＤＰＩの事務局体制を強化するということで、尾上を東京へ赴任してほしいと請われて、事務局長になりました。

介護保険との統合をにらんだ自立支援法案が登場し、台風の中でのデモとか1万人規模の集会をやるとか、反対運動が盛り上がり、介護保険との統合はいったん阻止できました。

権利条約批准に向けて　差別禁止を巡って

尾上：ちょうどそのころ、障害者権利条約の批准の話がでてきていました。2004年ぐらいには権利条約を作る委員会が開かれていました。

アメリカでADA法ができたのが1990年、日本でも障害者差別禁止法をと全国各地で学習会をしました。

2002年に、当事者が作る差別禁止法案をＤＰＩで作ったのですが、他の障害者団体からは「障害者施策で差別なんって言ったらだめです。そんなことを言うと協力してもらえなくなりますよ。社会連帯ですよ。」とすごく怒られました。差別禁止法への賛同はほとんど得られない状態でした。議院法制局も、「差別禁止法の制定は日本の法体系を変えるものになる」という意見でした。

差別解消法　アメニティフォーラムで三党合意

尾上：一方で、障害者権利条約を作るための国連特別委員会が開かれていて傍聴団を毎回派遣していました。世界中の障害者リーダーが集まって、「差別禁止だ！、施設収容は差別だ！分離教育は差別だ！」とガンガン議論しているわけです。世界は差別禁止の潮流なんだと、そういう経験が積み重なると、他団体も「日本も差別禁止法がいるね」と言ってくれるようになりました。

2006年には千葉で差別禁止条例ができて、全国に広がることになり、2010年に障害者制度改革推進会議が立ち上り、2012年に差別禁止部会で意見がまとめられ、2013年のアメニティフォーラムで、自民、公明、民主の3党の合意ができたわけです。

内閣府で差別解消法施行準備

尾上：2002年の差別禁止法案から10年ぐらいかかっていますが、その間、ほんとうにいろんなことをや

ってきてようやく、差別解消法制定にこぎ着けたわけです。それで2014年に権利条約を批准しました。それで僕の東京での仕事はひと段落だったのですが、内閣府から差別解消法の施行準備を手伝ってほしいと頼まれて、さらに内閣府で2年間働きました。
東京で、長い時間を過ごしましたが、青い芝と出会うことで確信になった、地域で当たり前に生活をすることができるインクルーシブな社会の実現のために法律制度を作るということに、少しは貢献できたかなと思っています。

あらゆる取っ手に手をかける

尾上：僕の中でジュディ・ヒューマンの影響も大きく、ジュディ・ヒューマンの「あらゆる取っ手に手をかける」という言葉、僕の大好きな言葉なんですが、一部のリーダーの動きだけで社会は動くものではなくて、障害者の大衆的な運動とか声の広がりが一番の原動力で、そして課題に応じて他団体とも共同していくということを大事にしながら進めてきたと思います。

運動の課題とちゅうぶへの期待

堀（編集部）：運動の課題とちゅうぶに期待することを教えてください。

警戒感をもって、強 か に

尾上：脅かすわけではないけれど、これからの時代は揺り戻しも含めてあり得ると思っておいた方がいい。この前の参議院選挙で、〇〇ファーストということが支持を受けるという状況に警戒感をもたなければならないかなと思っています。

大事なのは、今後、どんな組み合わせになってもどこの政党にも障害者政策を真面目に取り組んでもらえる議員を作っておかないといけない。それを意識して取り組んでいくべきかなと思います。
アメリカの障害者運動が強かだなと思ったのは、1990年にADA法が議会を通りますが、実はその前の大統領選挙で、共和党、民主党どちらのマニュフェストにもADAは掲げられていました。つまり、どちらの政党が多数になってもADAが通るように両方に役割分担して働きかけていたそうです。それだけの強かさをもってやってきたアメリカの障害者もトランプの前では今大変な目にあっています。
日本ではそこまでの強かさは育ってないし、これから色んな事が起きることも覚悟しないといけないと思います。

優生思想的なものが立ち上る心配

尾上：トランプや参政党の主張は、「反グローバリズム」ということですが、経済的なグローバリズム、新自由主義で、日本は30年とかやってきて、それで雇用が大変になって、生活が苦しくなったとグローバリズムへの感情的な反発があると思います。その中で、反グローバリズムを掲げた政党が伸びるということが多くの国で起きている状況です。

障害者権利条約をはじめ、国連を舞台に国際的な人権条約が整ってきた歴史があるわけで、新自由主義、グローバリズム反対の流れで、人権条約とかも含めて押し流してしまえ！みたいになりかねない。
〇〇ファーストということは、そうでない人をセカンドに置くと言うこと。そして、だれがセカンドか状況次第で変わる。
「若者ファーストと高齢者」、「男性ファーストと女性」、優生保護法なんかにみられるように「健常者ファーストと障害者」とか。
SNSで強いことを言ったものが勝ちという風潮の中で、優生思想的なものがまたもや立ち上る可能性があると心配しています。
例えば、子育て支援が必要、でも、財源問題になった時に、高額になっている終末期医療を全額自己負担すればいいんだと、そして、それなら最初から尊厳死を法制化して終末期医療をなるべく使わないようにしてもらった方がいいと、尊厳死法案が浮上する可能性もあるかなと思っています。
自分たちが言っている政策を認めさせるために誰かを叩いて支持を得るという流れが蔓延していています。
若い人向けの施策をするには医療費を抑さえる必

要がある、あるいは、障害者も施設収容の方が安心だし安上がりだという議論になってきたら、厳しい議論になるし、世論全体としては、そちらにあおられていく可能性もあると思っています。
対立構造をあおる政治になっていることに警戒感を持つ必要があります。

向こう10年間で、脱施設、インクルーシブ教育

尾上:もう一つ。私たちにはまだまだ、やるべきことがある。
今後10年かけて、脱施設、インクルーシブ教育を重点的に進めていこうということです。
施設の在り方検討会が今年度終わります。
施設問題の裏側として、地域での支援体制が整っていないという問題があるわけで、来年度からＤＰＩとしては、地域での支援体制について検討を進めてもらいたいと思っています。

脱施設地域モデルを作る

尾上:その時に、自分たちが具体的な地域モデルを持っているかということが大事で、施設や親元から、こうすれば地域移行できると示せることが必要です。
例えば韓国のソウル市が脱施設化条例を作ったように、大阪でモデルを作って、脱施設化条例を作るとかができればいいなと思います。

新規入所の防止を進める

尾上:まずは、新規入所の防止が大事です。
例えば、今まで親・兄弟で介護をしていたが厳しくなって、施設入所の相談があったときに、「いやいや施設でなくても、こんなふうに地域で暮らせますよ」と地域生活支援拠点、地域で暮らせる支援につないでいくとか、どう暮らせるか示せる状況を作ることが大事です。
脱施設が進んでいる国では新規入所の防止・制限をする取り組みをしています。

障害者の住まい　国交省と福祉の連携強化

尾上:、さらに、障害者が地域で暮らすというときに、住宅部局と福祉部局が連係した形で、障害者の住まいの確保にもう少し行政がしっかり責任をもって支援する形が作れないのかと思います。
現状は、住宅セーフティネット法があるとは言え、住宅政策は国交省が所管するだけで福祉は関係ないとなりがちで不十分です。
韓国では、日本で言うＵＲ（旧住宅公団）みたいなところに、施設からの地域移行の住まいを優先的に貸し付ける仕組みを持っています。

脱施設　全国キャラバン！！

尾上:脱施設地域モデルみたいなものを作って、それを全国に押し上げていく、そういう取り組みを含めて脱施設全国キャラバンを向こう何年間かの間に行う。
北は北海道から、南は沖縄まで、そして最後は東京に集結していく、バリアフリー法の時に、全国行動で、全国各地から東京に乗り込んだように。あるいは、その前は、メインストリーム協会の廉田さんたちがトライの取り組みで大阪から東京までバリア点検して歩いたみたいな、そういう脱施設に向けたキャラバンみたいな取り組みをぜひやっていく必要があります。

大阪が全国の牽引役になる

尾上:大阪の運動はもっともっと可能性があると思

います。大阪のバリアフリー条例が広がって、国のバリアフリー法になった。いわば、大阪の取り組みがモデルになって、全国を牽引してきた歴史があるわけです。
例えば、大阪で脱施設モデルを作って、これを全国に広げて行ったりできないか、そのためには改めて自分達でモデルを作って、他の団体ともテーマごとにちゃんと協働して、ちゅうぶ、障大連、大阪のいろんな全国団体の地域組織との連携も含めて取り組んでいければと思います。
僕はあと 10年間運動を続けられる体力はないかもしれないけれど、向こう 10年間の課題として、脱施設とインクルーシブ教育をスローガンとしてだけでなく、実際に地域でモデルを作って、そしてそれをキャラバンやいろんな形を通じて発信をして、ちゃんと国の制度にしていく動きを作る必要があると思っています。
バリアフリー法でいうと、1992年に大阪府で条例を作る、それと並行して、バリアフリーのアクセス全国行動を毎年、毎年やって条例を全国に広げ、10年かけてバリアフリー法を作ったわけです。10年ぐらいのスパンでモデルを作り、それを全国に広げ、国の制度にしてきたということです。
脱施設も、それぐらいの社会運動としての取り組みを展開していければと思います。

ちゅうぶが底力を発揮する

非常に重要な中心部隊として、大阪の運動というのはあると思う。ちゅうぶは大阪の運動の中では歴史のある団体です。青い芝運動を母体として、ずっと取り組んできたちゅうぶとして、底力を発揮していかければなと思います。

共に生き　共に闘う

堀(編集部)：最後に職員へのエールをお願いします。

尾上：ちゅうぶに職を得たことをきっかけに障害者運動に関わってくれた職員もいると思います。しかし、ちゅうぶに関わる限りは、しっかりと障害者運動の目指すべき理念とか歴史を学んでいただいて、日々の活動に活かしていただきたいです。
そして、ちゅうぶの良さというのは、もともとは同じ釜の飯を食うという文化みたいなものがあって、「共に生き、共に闘う」という古いスローガンを出しますが、運動を一緒にするけど、その前提は一緒に生きる仲間なんだということが根底にあってほしいと思います。

ワクワクを忘れないで！

日々の介護ということと共に、障害がある仲間と一緒に活動したりとか、その中での面白さ、楽しさとか新しい発見とかを一緒に見出してほしい。
運動は成し遂げたら終わりでなく、何かを成し遂げたら新しい課題とか、いろんなテーマのヒントが出てくると思うんです。
僕は差別解消法ができてから、ずっと言っているのが、今こそ、もう一度、「そよ風のように街に出よう！」みたいなことが大切な時代だなと。
バリアフリー化された空間だけで移動するということだけだったら、今の大阪市内の地下鉄だけみれば、そんなに昔みたいに移動に苦労することはないわけです。でも、バリアフリー化された範囲内で満足する生活が、僕たちが求めている社会ではないと思うんです。
できあいのバリアフリー化に満足することなく、それを超えたところに僕らの運動の新しい課題やテーマのヒントがあるので、みんなでそれを見出すワクワク感みたいなものを運動としては忘れないでいてほしいと思います。

堀(編集部)：貴重なお話をありがとうございました。

大阪×福島もちもちの会
研修・交流企画報告！

みなさんこんにちは！チームもちもちの森園です。
福島県郡山市にある、あいえるの会の緑川　洋さんが9月22日(月)～24日(水)まで大阪に研修と交流に来られました。今回は、その様子を報告します。

緑川　洋さん

チームもちもちのおさらい…

●チームもちもちとは

もちもちの意味は大阪の大と福島の福で大福のように
もちもちと粘り強く繋がっていこうという想いが込められています。
2017年福島県郡山市にある特定非営利活動法人あいえるの会の緑川洋さんが大阪へ研修に来られた時の有志で一週間の介助をボランティアで行なったところから結成されました。

●あいえるの会とのつながり

大阪研修での緑川さんの姿に刺激をうけて、あいえるの会に関わる人と交流したいと思うようになりました。大阪であいえるの会前理事長白石清春さんをお招きしてＮＰＯ法人ちゅうぶ代表尾上浩二さんと対談企画。2019年3月には大阪と福島の障害当事者が集まって大阪で合宿を開催したりと長年交流が続いています。

9月22日(月)緑川　洋さん　ようこそ！ＮＰＯ法人ちゅうぶへ！

緑川　洋さんの1日目は、青木　良さんに生活史を発表してもらいました。青木さんは、ＮＰＯ法人ちゅうぶのグループホーム・リオで生活されていて週4回同法人の生活介護青おに、に通われています。生活史の他に青木さんの自立生活プログラムの担当をしている自立生活センター・ナビの山下から、これまでのプログラムの内容を説明させていただきました。

当事者スタッフになるための研修を週２日受けています。今後は日数を増やしていきたいです。

緑川さんは一人暮らしをされていて１か月の介護時間数は 470時間。7人のヘルパーさんが介護に入ってくれているそうです。福島県では、重度訪問介護を利用している障害者が少ないです。実家や「あーすろーど（自立移行住宅）」で生活している時より、いろんなことが出来る時間が増えた。とお話ししてくれました。

夜は、チームもちもちのみなさんや、ちゅうぶのメンバーが集まり、交流会を行ないました。お寿司、オードブルの他、手作りのお好み焼きやチャプチェなどを食べて楽しい時間を過ごしました。

交流会後半では、緑川さんが 2017年に研修を受けられた当時の話を聞きながら、改めて懐かしいなという思いと、もう8年も続いていることがすごいなと改めて思いました。緑川さんのお話でもう１つ印象に残っているのは「重度な人が一人暮らししているのは、僕以外にあまりいません。そこは誇りに思います。」と話されていて、僕も緑川さんみたいに自分の生活に自信と誇りが持てるようになっていきたいと思いました、他にも緑川さんのお部屋の紹介の動画もありました。緑川さんの生活の工夫や歌手のGLAYが好きということがビシビシと伝わってきました。質問コーナーもあって盛り上がりました。

☆☆

9月23日(火)緑川さんともちもちメンバーで万博にいこう！＜2日目＞

緑川さんの今回の目的の１つである大阪関西万博に行きました。 今回、体験したパビリオンはＮＴＴパビリオン、フランス、トルクメニスタン、フィリピンでした。

ゲートを抜けてすぐに記念撮影をしました。

フランスパビリオン

フランスパビリオン
高級感漂う建物でした。ルイ・ヴィトンが飾られている部屋がありました。僕もルイ・ヴィトンの似合う男になりたいと思いながらまわっていました。

フィリピンのパビリオンは、織物が飾ってありました。

大屋根リング下の
緑川さんかっこいい！

大屋根リングのトイレ
手すり、背もたれとベッドが設置されていました。

トルクメニスタンを
満喫！？

大屋根リングにも無事に登ることができました。この日は、9月下旬ということもあり風がとても気持ちよかったです。パビリオンも上から見ると数多く広がっていて、壮大な景色だと思いました。大屋根リングの上は、あまりに気持ち良すぎて歩いている途中に眠くなりました。

大阪関西万博を満喫しました。

万博を体験した感想(森園)

この日は夕方5時半ごろに会場を出ました。夢洲駅のエレベーターは地上から改札に降りるのが2台、改札からホームまでは1台しかなく、まったく足らないと思いました。電車に乗るまで30分ほどかかりました。普段なら並ぶことがあんまりないので時間が長く感じました。パビリオンは行く前に想像していたよりも車椅子などの優先レーンがありスムーズに周れた印象でした。パビリオンによって運営が違うので、統一してほしいなと思うことがありました。暗くて狭い通路等もあり、車椅子で周るには他の人に注意しながら周る必要があるのでゆっくり楽しむには時間がいるなと感じました。緑川さんも最初一つも周れないんじゃないかと不安に思われていました。しかし満足された様子で安心しました。最後に森園のぼやき。。。こんなに内容がいっぱいだから、チケットが安かったら良いなと思いました。

☆☆

9月24日(水)医療的ケアが必要な方への支援について学習会を行いました。＜3日目＞

特定非営利活動法人Ｑ.Ｂ(大阪市生野区)の川西さんを講師にお招きし同法人で支援されている医療的ケアが必要な北村　佳那子さんの生活の様子や支援のやりがい・難しさなどを語っていただきました。
佳那子さんの思いを感じ取ろうと支援者や家族もチーム一丸になっている様子がよく分かりました。

☆☆

【緑川さん今回の研修感想】

6年ぶりにもちもちの会として大阪の皆さんと会えて凄く、嬉しかったです。毎回温かく迎えてくれて感謝しています。大阪万博も森園さんたちと行けて楽しかったし良い思い出になりました。また、毎回セミナーで、結構、脳性麻痺の自立生活について話は聞くけど、医療的ケアのことが少ないので、今回の研修でそれを学びたかった一番の理由です。あいえるの会の医療的ケアの方々の自立に繋がって欲しいと思います。私自身勉強になりました。３日間本当にお世話になり、ありがとうございました。また、会いましょう！

ピアスクール卒業生企画
～私たちが新しいページを開く

スクラム学園のピアスクールを卒業した森園、杉原、島袋が、交流会企画を 9月5日(金)に開催しました。僕たちのピアスクール体験の報告を聞いていただき、カレーを食べながら、カラオケ、花火などをして、みんなで交流できました。無事に楽しい会が開催できて本当に良かったです。みなさんありがとうございます！

(文責:島袋、杉原、森園)

《概要》

日時 ： 9月5日(金)18:30～21:00(21時以降自由解散)

場所 ： おにわ4F、屋上

内容 ： 食事(調理)、ピアスクール発表会、カラオケ、花火等のコンテンツを通し交流する。

参加人数 ： 30名

＜きっかけと目的＞

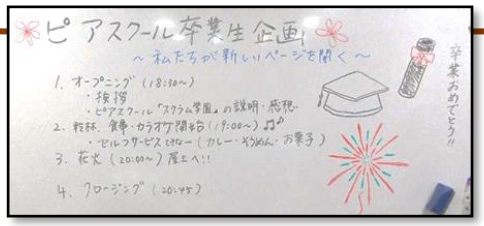
きっかけ ： ピアスクール“スクラム学園”への参加。

“スクラム学園” 内でＩＬＰを作ってみようというというテーマが設けられた際、偶然ちゅうぶから参加したメンバー3名が同じグループになり、いつかちゅうぶで取り組みを企画したいという想いがありました。ピアスクール修了後、月1回以上の打ち合わせを重ねる中で、経験したことのないことをやってみたい、通所メンバーと交流の場を作りたいという想いが膨らみ、「私たちが新しいページを開く」を取り組みのテーマに設定しました。

目的 ： 当事者が主体となって企画運営を行い、経験を積む。

スクラム学園とは？（ピアスクールの説明）

- 障害者にまつわる様々なテーマを、障害のある仲間同士で学び合う企画。
- 自立生活センタースクラムの当事者スタッフが理事長や校長、教頭などの役割になって企画を運営。
- CIL自立生活センターの役割や歴史、ピアカウンセリング、差別解消法、交通問題など様々なテーマがありました。



全体司会： 杉原 大地

18:30～【オープニングアクト 】

卒業生を代表して ご挨拶　森園 宙

ピアスクール(スクラム学園)の報告と感想　森園宙、島袋愛子、杉原大地

19:00～【懇親会】 みんなでカラオケ、花火で楽しもう！！

乾杯の音頭　島袋愛子

カレーとお菓子でご歓談ください。カラオケ随時受付！！ 懇親会進行　森園宙

花火（暗くなったら 20 時頃～ 屋上です）カラオケの同時並行

20:45～【中締め】 お時間が許す方は、1F でおしゃべりができます

中締めの挨拶　杉原大地

21:00～【片付け】

＜企画をしてみての感想＞

森園 宙

台風が近づいていた中、企画が開催出来て良かったです。
準備の会議や資料作りなど通して3人がより一層仲を深めることができ、嬉しく思います。
卒業生が考えたカラオケや花火の企画を参加してくれたみなさんが楽しんでくれていて、企画を成功出来て良かったな！と達成感がありました。
この企画が出来たのは、協力してくれたみなさんと、島袋さんや杉原さんが一緒にがんばってくれたからだなと思います。ありがとうございました！

杉原大地

準備から本番までとても楽しい時間でした。東さんがカレーのトッピング用にシャウエッセンを焼いてくれたのですが、東さんとおいしそうやなぁと言いながら、食べたかったのを我慢していたのに…岩見さんが勝手に一個つまみ食いしたので、ちょっとムカつきました（笑）。進行役は初めてでしたが、意外としっかり話せて自分でも驚き、新しい自分を発見して自信につながりました。カラオケでは枕島さんのチェッカーズがとても盛り上がりました！そして花火も久しぶりで楽しかったです。火が怖くて屋上の段差から車いすで落ちそうになるハプニングもありましたが、それも含めていい思い出になりました。また新しい企画を考えて挑戦したいです。
参加してくださったみなさん、そして協力していただいたスタッフのみなさん、本当にありがとうございました。

島袋愛子

夜の時間帯の企画の経験がなく、至らない所も多々があったかと存じますが、最後までご支援下さり、ありがとうございました。

最後に･･･ご参加頂いた皆様、運営にご協力頂いた皆様に心より感謝申し上げます！！

準備中の風景

ピアスクール卒業発表会

カラオケ＆花火交流の様子

自立生活センター・ナビ
からのお知らせ

杉原　大地さん
自立生活プログラム報告

生活介護赤おに、に通所している杉原大地さんの自立生活プログラムを 4月から始めています。今回は、杉原さんのＩＬＰにオブザーバー参加している、ナビ当事者スタッフの森園と 5月のＩＬＰの時にも協力していただいた、生活介護青おに、に通われている渡海さんに生活保護制度のしくみについてお話ししていただきました。
（文責：山下）

杉原さんの感想

生活保護制度について、まったく知らなかったので、森園さんや渡海さんの話を聞けてスッとしました。

森園の感想

森園自身どこまで話せるのか不安でしたが、渡海さんにも協力してもらいながら、いろんな生活パターンについて話をすることができたかなぁと思います。同じ制度でも新しい発見があったのでよい学びの機会になりました。

渡海さん

次回は、いよいよ最終回です。
これまでのＩＬＰの振り返りと今後についてのプログラムを行ないたいと思います。

自立生活プログラム（ＩＬＰ）とは？

多くの障害者は障害があるというだけで、ひとりで買物に行ったり友達と遊びに行ったり、仕事をするなどのごく当たり前のことを経験する機会すら失ってきています。障害があることで制限された生活によって奪われてきた外出・料理・遊び・金銭管理など様々な経験を自立生活をしている障害者がリーダーとなり楽しみながら取り戻していくプログラムです。

令和7年度日本博2.0事業（委託型）バリアフリー演劇を核とした障害者の文化芸術活動の魅力世界発信プロジェクト
誰もが楽しめるバリアフリー演劇祭2025 IN 大阪

バリアフリー演劇祭2025

2025 IN OSAKA

入場無料

【ももじろう】
ぱあとなぁ劇団

【ジャンヌ・ダルク】
東京演劇集団　風

【妖怪バリヤーをやっつけろ！】
インクルーシブ劇団夢屋

11月23日(日)（13:00開会式～18:00）

24日(月祝)（10:50開会式～16:00）

森ノ宮医療大学体育館

（大阪市住之江区南港北1-26-16）

ニュートラム
【コスモスクエア駅】
【トレードセンター前駅】
より徒歩５分

鑑賞サポート

- 舞台上での手話表現
- 舞台背景にバリアフリー日本語字幕
- ライブ音声ガイド
- 舞台説明あり
- 事前資料貸出
- ※必要な方は当日受付でお申し出ください。
  数に限りがございます
- 英語字幕あり
  THIS PLAY HAS SUBTITLES ON THE SCREEN.
  YOU CAN ENJOY THIS PLAY
  WITH SUBTITLES IN ENGLISH.

【主催】文化庁・独立行政法人日本芸術文化振興会・全国地域生活支援ネットワーク
バリアフリー演劇祭大阪公演実行委員会
【共催】OSAKA IL 7

日本博 JAPAN CULTURAL EXPO 2.0

童夢KANSAIフェスティバル in長居公園

11.8 Sat

Illust by Hasima Tanaka

インクルーシブな社会の実現を目指して取り組もう!!

2025

11月8日(土) 11:00-16:00

場所：長居公園 自由広場

電車でお越しの方

地下鉄御堂筋線「長居駅」徒歩5分

JR阪和線「長居駅」徒歩10分

※会場内では当スタッフが広告用に撮影させて頂く場合がございますので、予めご了承下さい。

後援：大阪府｜大阪市｜大阪府社会福祉協議会｜大阪市社会福祉協議会｜大阪市教育委員会

【問い合わせ先】 事務局：童夢KANSAIフェスティバル実行委員会(担当：伊勢・松原)

〒543-0052 大阪市天王寺区大道3丁目1-26 NPO法人ムーブメント TEL：06-4302-5203

童夢KANSAI(HP)▼ クラウドファンディング▼

2025.11.17（月）
阿倍野区民センター
大ホール

入場料500円
介助者無料
高校生以下無料
※参加費は当日現金にて
お支払いください
前売りはございません

上映会のお問い合わせ
06-6754-3011
NPO 法人出発のなかまの会

杳かなる
はる

プログラム
10:15　開場
10:50　上映会①
13:00-13:45
トークショー
ゲスト：佐藤裕美さん
宍戸大裕監督
大阪の障害当事者
14:00　上映会②
※上映会①と②は同じものです
ご都合の良い方を鑑賞ください

闇夜のような日々――
沈黙を照らすものはあるか？

進行により全身不随にいたる難病ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）
喪失と絶望のただなかを歩く人たちの　いのちの旅

監督：宍戸大裕　ナレーション・主題歌：寺尾紗穂

制作：映画『杳かなる』製作委員会　2024年/日本/カラー/124分/ドキュメンタリー

共催：NPO 法人出発のなかまの会　NPO 法人ちゅうぶ　NPO 法人自立生活センター・おおさかひがし

ぼくたちは　やくそくしたくても　できなくなるのだから

「私の声を奪うな
私をいなかったことにするな」。

全身の筋力が徐々に弱まり、病状の進行によっては声も失われ、意思を通わせることもむずかしくなる難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）。病を発症し、生死のはざまに揺れる一人の女性が、生を証しするように詩を綴る。ある日めぐり合う、同じ病を生きる先行者。「私もいまも迷いの中にいます」。声を失った男性は、透明な文字盤を介し生きることを一緒に考えたいと告げ、ふたりは長い旅をはじめる。3年半にわたる別れと出会いを、映画スタッフはともにする。
やがて「身体に閉じ込められる」かのように、眼の動きも微かになる日――。それでも呼びかける者たちを支えているのは何だろうか？

“私”を失いつづける日々に、
言葉がのこされる。
言葉も失われた先で、
人はいのちに触れる。

人間が「生きる意味」は、もしかしたら、
人と人とのあいだに灯るのかもしれない。
その人肌ほどの火種があれば、
きっと、人は絶望という闇に抗える。
どうか、静かな呼吸で観てほしい。
この映画が、観る人とのあいだに灯そうとしているものを、
全身全霊で感じ取ってほしい。

――荒井裕樹〈文学者・文筆家〉

ＡＬＳとは？ ALS（筋萎縮性側索硬化症）は、手足やのど、舌、呼吸を動かす筋肉が徐々に痩せていく病気です。進行の速度は患者さんによって異なり、発症からの余命は3～5年と長らく言われてきました。しかし、現在では呼吸器や経管栄養などが発達し、数十年にわたって在宅療養をしながら自分らしい生活を送る患者さんも増えています。

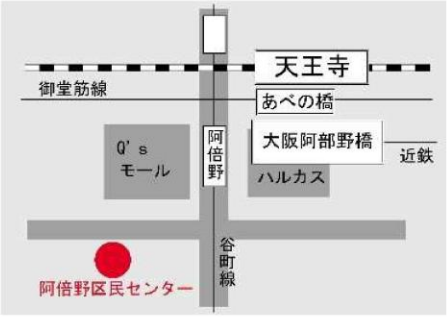
杳かなる ―― 木の下に日が沈み
「杳（よう）」という漢字は、日が木の下に沈む様をあらわし、暗くてはっきりしない、奥が深い、はるかに遠いという意味があります。進行性の難病を生きることはこの字があらわすように、ときに先の見通しのない絶望の日々です。絶望の淵に佇ち、ふさぎこんで声も出ない人は何を思うのか。“死に方”をめぐる議論が先鋭化するいま。誰かと今日の暮らしを折りかさねる先に、ひらかれる明日が見えてきます。

監督・構成・編集：宍戸大裕／撮影：高橋慎二／音楽：末森 樹／整音効果：永峯康弘／ナレーション：寺尾紗穂／主題歌：『たよりないもののために』（作詞・作曲 寺尾紗穂）
宣伝デザイン：アルビレオ／宣伝写真：澄 毅／企画・制作：映画『杳かなる』製作委員会／お問合せ：映画「杳かなる」上映委員会／公式HP：http://harukanaru.com/

2025.11.17（月）

阿倍野区民センター　大ホール
大阪市阿倍野区阿倍野筋 4-19-118
06-4398-9877

大阪メトロ谷町線「阿倍野」駅⑥号出口から西へ 50m
阪堺電車上町線「阿倍野」駅から南西へ 180m
大阪メトロ御堂筋線・JR「天王寺」駅
近鉄南大阪線「大阪阿倍野橋」駅から南へ 800m



木戸通雄の部屋

「阪神リーグ優勝記念。目指せクライマックスシリーズ優勝！
～そして日本一へ～」

木戸通雄の部屋

①1985年(昭和60年)

昔むかし、木戸がジャスコ川西店と梅田阪神百貨店本店に現場があった警備会社に勤めていた頃(当時22歳)、吉田義男監督率いる阪神タイガース、バース、掛布、岡田、そして確か逆転男の木戸克彦の力と、猛虎打線爆発で昭和60年、敵地明治神宮球場で東京ヤクルトスワローズに逆転勝利しリーグ優勝した。その日の阪神の勝ち投手は、中西清起だった(※木戸と同じく今62歳、そして中西も確か3月早生まれの卯年)。その後、阪神は日本一になった。戦後阪神の歴史上、旧ミスタータイガース、野球の神様ともいえる、小山正明投手も果たせなかった念願の日本一だった。

②2023年(令和5年)

木戸が約46歳の頃(15年前)、真弓明信監督の時代、甲子園球場の外でハイポーズ(※写真左下、2010年10月、あの頃はみんな若かった･･･)。この年は残念ながら優勝できなかった･･･。その 13年後の2023年、阪神ファンの皆が願った、岡田彰布監督率いるタイガースが日本一、関西対決でオリックスに勝利した(写真右下、阪神百貨店梅田本店ビルにて)。優勝記念セールにも行った。残念ながら著者木戸はチャンスを逃がしてしまった。通所が休みの日に、京セラドームのテレビ中継を見ようとして、関西テレビやっ!！と悟り 8 チャンネルを付けていたが、ナント京セラドーム中継なのにサンテレビジョンで放送していたらしい。何十年かに一回あるかないかの関西対決を見逃したア～～ア～。

2010年撮影

それにしても阪神タイガースの日本一は、今まで昭和60年の西武ライオンズ球場、2度目の令和7年には京セラドームで、いずれも過去2回、相手球場で阪神タイガースが胴上げをした。その時球場にいた相手ファンの胸の内は大変ハガイタラシイものだったのだろう。私より歳のいったプロ野球ファンに聞いたことがあるが、大昔の木戸が生まれる前のプロ野球なら、今みたいにビールが紙コップではなく瓶で、規則も今ほど厳しくなくて負けたファンがビール瓶を球場内に投げ込むといったようなトラブルもあったらしい。今現在は球場内外の持ち物検査のセキュリティも強化され、球場に入る時には手荷物検査も万全で危険物がないかの配慮にも神経を尖らせています。

2023年撮影

それにしても今現在もそうだけど、イヤ～～ア昔のプロ野球選手やその前身となる甲子園球児は苦労したんだろうな～～。大阪の明星高校出身、昭和38年夏の甲子園優勝投手、平野光寿さんは生まれたときに父母がいなかった。(クロレラの社会人野球から後に、旧大阪近鉄バッファローズのライト外野手)平野さんは昔ベースボールという雑誌に「青春時代に5000発どつかれた。」と文章を書いていた。木戸が約25歳の時に観たテレビでは、元近鉄バッファローズの栗橋茂さんは、「選手をどついていた。」と自分で言っていた。でもこれは過去の野球人のこと。今現在は高校野球、プロ野球も厳しくなり先に書いたことは無く

なったようです。あしからず。どうかご了承ください。

③2025年(令和7年)

昭和60年日本シリーズ制覇から38年ぶり、9月7日(日)、阪神創立90周年節目の年に、2年ぶり7度目のリーグ優勝(史上最速優勝)。カープ最後のバッター、秋山が打ったセンターフライ(阪神史上に残る最速優勝のウィニングボール)を近本ががっちりグラブに収めた。藤川球児監督、就任一年目にして最速リーグ優勝を果たした。

　これからクライマックスシリーズ(※2007年いまから18年前に出来たシリーズ、上位3チームが日本シリーズの出場権を勝ち取るため戦う)、しんどいナァ～。

9月12日(金)、甲子園歴史館(障害者割引600円)入場、館内にて「あった！あったゾォ～～今年のリーグ優勝のペナント。」

　さぁ、クライマックスシリーズはライバル2位浮上の横浜ベイスターズか？3位巨人か？われら、ちゅうぶ猛虎会が応援している阪神タイガースか？

　どうやら木戸の9月24日(水)　現在の推理では、セ・リーグ2位の横浜ベイスターズがクライマックスシリーズで優勝し日本シリーズで福岡ソフトバンクホークスに勝ち日本一優勝するだろう。

　これは著者木戸が考える夢の妄想だから、読者の皆様へ、そして阪神ファン、セ・リーグを愛する皆様、北海道日本ハムファイターズのファン、オリックスバファローズのファンとパ・リーグを愛する皆様へ謝罪しておきます。どうもすみませんでした。ご了承ください。

　今年、北海道日本ハムファイターズの清宮幸太郎がよく打っている。新庄剛志監督、名前のとおりツヨシいいっ！！いよいよ待ちに待った10月11日(土)～セ・リーグのクライマックスシリーズ。果たして、阪神タイガース監督就任1年目藤川球児は？元阪神タイガース(福岡西日本短期大学付属高校出身)新庄監督は？ハマの番長、横浜ベイスターズの三浦監督は？パ・リーグも注目、関西と同じく西日本の福岡ソフトバンクホークス監督就任2年目、小久保監督は？どこが日本シリーズに躍り出るのか？

※いまから40年前、当時高校2年生の岐阜県に住んでいた桂福若さん(現在56歳落語家)が、本人は巨人の王貞治(現福岡ソフトバンクホークス会長)のファンだったが、友達に「阪神が優勝したらどうする？」と言われて、罰ゲームで「道頓堀に飛び込んだらぁ！！」と言ってしまい、一番初めに道頓堀に飛び込んだ。桂福若さんが飛び込んでから、道頓堀に飛び込む阪神ファンが多くなった。今年も大阪府警がついたてを立てても9月7日(日)の夜、約29人の阪神ファンが道頓堀にダイビングしたらしい。良い子のみんなはマネしないように！

文責:木戸

ショートエッセイ とある送迎の車中のひとこま（とんだやろう番外編）

ドライバーA： 身体が動かず、発話も難しい車イスメンバー(特定の誰でもなく)にとって、身体と意識の関係って、「身体の牢獄に閉じ込められている精神」、みたいなもんやろうね。 ＜以下、A＞

同乗者B: そうや、そうなんや(ガシガシ) ＜以下、B＞

A: でも正反対に、身体は動いていても、精神や知的とか行動の障害で、特定のこだわりが普段の生活にすごい困難があったとして、、
もしそのこだわりとかで、自分の身体が環境から縛られているみたいなことになったり、社会のなかで理解されないしんどい思いをしていたら、「精神の監獄に閉じ込められている身体」、のような言い方もできひんかな。

同乗者C： うーん、言うてることわからへん。 ＜以下、C＞

A： まぁ、身体と精神の二分法にしなくてもええんやけど。
身体の牢獄に閉じ込められている人が、例えば寝ている時に見る夢の中で自由に走り回ったり、おしゃべりしたりしてることもあるかもしれへんし、それで目覚めたときに、現実との落差に何度も愕然としてしまったりとか。

B： そうやそうや(ガシガシ)

A： 精神の監獄に閉じ込められている人は、寝転んだり跳ねたりできるとしても、その身体を現実の病院、ほとんど監獄みたいなところに拘束されたりしてきた人もいるよなぁ、、、あくまで比喩やけど。

C： 言うていること難しいけど、なんかちょっとわかる気もする。

A： でも、ここからが大事で。
じゃあ、健常者と言われているマジョリティも、みんながみんな、身体や精神の牢獄に閉じ込められてなくて自由なのかと言うと、実はそうでもなくて、身体と精神、共に牢獄に閉じ込められているのかもしれへん。

BとC： どういうこと？

A： 自由だと思っているのが大いなる勘違いで、閉じ込められて「いない」と思っているから逆に見えていない、かもね。「閉じ込め」のもともとの発想こそ、効率や生産性などで評価される「優劣の監獄」であって、実はそこに自分自身と周りの人を閉じ込めているのかもしれない。なんてね。

BとC： ふーん。・・・人間って、何なんやろうね。

協力会費・カンパ協力者名簿

辰巳　太基　さん　（熊本県） 特定非営利活動法人さかえ会　（旭区）	八木　修　さん　（能勢町）

10月7日現在

ご協力ありがとうございました（担当：安東）

「キメハラじゃないよ～その３～」

赤おにくん:「順位をつけない運動会が増えてるんだって」

青おにくん:「へぇ～、勝てなくて悔しい思いする経験も必要だと思うけどね」

赤おにくん:「まあ、それぞれ意見はあるでしょうね」

青おにくん:「じゃあ、ボクたちも運動会に行こうか、桃食い競争 、頑張るぞ !」

赤おにくん:「今年は 会場 が鬼ヶ島から無限城 に変わったらしいよ」

青おにくん:「え～!そうなの!?、 あそこ広すぎてしんどいんだよね 、迷路みたいだし…」

赤おにくん:「皆さんも何か運動してみてはいかがでしょう」

２０２５年１１月～１２月　ス　ケ　ジ　ュ　ー　ル		
11月８日	土	童夢KANSAIフェスティバル　11時～16時　@長居公園自由広場
11月9日	日	泉大津　ＧＯフェス！　10時～16時　@シーパスパーク
11月14日	金	障大連大阪市ブロック「12月15日、16日大阪市交渉に向けた学習会」13時半～　@コミセン
11月15日	土	一日だけのドキュメンタリー映画祭「もうろうをいきる「妻の病」他、伊勢眞一監督作品　@中央公会堂
11月17日	日	「杳かなる」上映会（ＡＬＳ当事者の映画）@阿倍野区民センター大ホール　10:50～/14:00～の 2回上映
11月23日	日	24日（月）バリアフリー演劇祭　@森ノ宮医療大学（コスモスクエア駅近く）
12月15日	月	障大連大阪市オールラウンド交渉1日目「権利の実現、交通、教育」13時～17時　@天王寺区民センター
12月16日	火	障大連大阪市交渉2日目「介護、グループホーム、地域移行・地域生活」10時～17時@天王寺区民センター

●10月4日（土）梅田おにごっこが無事終了。2日前までは曇りだろうと油断していましたが、朝から雨。途中2度ほどしっかり降って、どうなることかと思われましたが、約350人が参加。グラングリーン大阪～ＪＲ大阪駅近辺をクイズを解きながらウォークラリーで楽しんでもらいました。スカイビル1階のワンダースクエアでは、フェイスペインティングや電動車いす体験、車いす講習、聴覚・視覚・言語障害者との交流体験コーナーを実施。空中庭園に来た外国の観光客も参加。波乱万丈の楽しい一日でした。（いしだ）

●不覚にも蜂窩織炎で入院してしまった。近所のクリニックに風邪薬をもらって高熱にうなっていたが好転せず、発達障害の息子も一人でなんとか頑張ってくれることを確認した上での入院ということで手間取ってしまった。でも幸いにも、1週間の入院で事なきを得た。入院中は、点滴されながら、U-NEXTでひたすらドラマ（「愛の学校」とか、「４０までにしたい１０のこと」とか）をみたり、普段読まないフェミニズムの本とか読んだり、上げ膳据え膳だし、少しの入院ならいいなと思ってしまった。復帰後は、あっという間に、忙しさに押し流され、アップアップしている。入院中に行くはずだった万博も、リベンジして、先日行ってきた。私の最後の万博。ＵＤガイドラインの委員に参加してから3年間ぐらい付き合った。大屋根リングを歩きながら、居並ぶパビリオンを見ながら、さよなら万博と挨拶してきた。もっと、万博に行きたかったな。（ほり）

●補聴器を新しく買い替えた。新しい補聴器は 4代目の補聴器となった。本体の色はシルバーで、耳栓の色はオレンジにした。シルバーを選んだのは、ゴールドかシルバーの 2択だったのもあり、10年使った補聴器がゴールドだったので、シルバーにしてみた。耳栓の色はずっと青だったのもあり暖色系にしたく、オレンジを選んだ。「ちゅうぶカラーやんね！」と周りから言われている。買う前はあんまり意識していなかったので、確かにそうやなと（笑）新しい補聴器をするとたくさんの音がわさわさと入ってくる。古いほうの補聴器は、最近調子が悪くて、付けてもあんまり意味がないくらいに音が小さかった。新しい補聴器を付けると、大きい音が周りで鳴ったとき、「キーン」と頭に響いてちょっと目が回ったりした。（慣れるまで時間がかかるかな・・・）そういえば雷の音が一瞬聴こえたような気がした。何年ぶりか分からないくらいに久しぶりに聞いた。いやもしかしたら雷の音ではなかったかもしれないけど、窓の外にきらっと光る稲妻を見たので、多分あっているはず。自分の耳でほとんどの音が聴こえなくなってだいぶ経つ。けれども、補聴器をつけてガサガサと音のある世界に入っていく楽しみを、私はまだ味わっていたいなと思う。（まつくら）

【東住吉区障がい者基幹相談支援センター】
【自立生活センター・ナビ】
〒546-0042　東住吉区 西今川 2-3-8
でんわ　＝　06（6760）2671
ファックス ＝　06（6760）2672

【障害者 活動センター　赤おに】
〒546-0031　東住吉区 田辺 5-6-10
でんわ　＝　06（6623）7300
ファックス＝　06（6657）5010

【グループホーム・リオ】
〒546－0032　東住吉区 東田辺 2-21-21
でんわ＆ファックス
＝　06（6608）5244

【ヘルプセンター・すてっぷ】
ＮＰＯ法人ちゅうぶ　２階
でんわ　＝　06（4703）3741
ファックス＝　06（6628）0271

【障害者 活動センター　青おに】
ＮＰＯ法人ちゅうぶ　１階
でんわ　＝　06（4703）3742
ファックス＝　06（4703）3743

編集：特定非営利活動法人
【ＮＰＯ法人 ちゅうぶ】

〒５４６－００３１
大阪市東住吉区田辺5-5-20
でんわ＝06（4703）3740
ＦＡＸ＝06（6628）0271
ホームページ＝https://npochubu.com/
メールアドレス＝chubu@npochubu.com
郵便振込口座：00960-6-313427
通信 定期購読料＝１年間2,000円